

# 私の百足(むかで)人生と沖縄大学

——大学と共に研究と教育四十年——

大 嶺 哲 雄

はじめに

## I. 学生たちとの思い出

- A. 教養ゼミ：「ひーじゃー」教室の思い出
- B. 研究テーマ：百足(ムカデ)人生のはじまり  
「土壌動物」との出会い

## II. 沖縄大学の沿革

- A. 沖縄大学民主化闘争
- B. 沖縄大学と国際大学との統合問題
- C. 沖大存続闘争

## III. 研究テーマから「琉球産 多足類の現状」

- A. 日本産多足類の流れ
- B. 琉球産 多足類分布の傾向
- C. ムカデから学んだこと。
  - 1. 森林環境の危機
  - 2. 森林指標としての土壌動物

(添付資料) 研究年表と論文目録

はじめに

沖縄大学の研究の歴史と共に歩んできた沖縄大学紀要は、教養科の改組により、このたび2000年をもって、38年の歴史に幕を降ろすことになった。

大きな灯火が消えていくような寂しさと名残り惜しい気持ちでいっぱいである。

沖縄大学論叢は当初、法学科、経済学科、商学科、英文学科そして教養科を網羅した全教職員の研究発表の場として重要な役割を果たした。のちに各学科

が充実するにつれて、その機能の拡大と学科の独自性から現在では各学科の紀要が出版されるようになった。

教養科は創刊号の伝統を受けつぎ、沖縄大学紀要として今日まで本稿を含めて通算37号を出版した。

長い間、教員各位の発表の場として、ときに自己研修の場として果たした役割は大きい。また、沖縄大学紀要は教養科教員を中心に、資質の向上はもとより、沖大の研究と教育の成果を発表する場として広く社会にこれを紹介した。さらに、このことは地域に根ざし、地域とともに学ぶ大学として沖縄大学の真価を発揮し、社会的にも高い評価をうけたものと信じている。

沖縄大学紀要はひとまず廃刊となるが、今後は新学部で、それぞれの立場からこれまで以上の研鑽を積み、引き続き各々の所属学部で一層のご活躍あることを祈念します。

この貴重な時期に本稿に執筆の機会を与えてくださった、教養科科長田里修教授、山里将輝助教授、国吉和子教授ほか紀要編集員スタッフをはじめ全教養科教職員各にお礼を申し上げます。

## I. 学生たちとの思い出；

1961年（昭和36年）、筆者は前任校、那覇高校教諭から沖縄大学に教養科生物学専任講師に就任した。そして、1998年3月で（平成10年）定年を迎えたが、高等学校の教員時代を含めると教歴45年、教壇生活を過ごしたことになる。

沖縄大学（以下沖大）は筆者にとって、研究はもとより、生涯通じて経験することの出来ない貴重な体験と人生勉強の場をあたえてくれたことに感謝している。

その意味で、拙稿は大学での教育と研究生活に一応の節目として、若き日の情熱を燃やし、学生たちと苦楽をともにした思い出をつづり、その上、第二の人生をスタートさせる意味からも、筆者の百足（ムカデ）人生を省みるために、私ごとながら 四十年を振り返ってみたい。

#### A. 教養ゼミ：「ひいーじゃー」教室の思い出

赴任当時は生物学と科学概論を担当したが、研究室、実験設備もなく、二教室を通した大教室（150人収容）で、Operinの“生命起源”や“性の進化”などを講義した。

文系の学生たちには、やはり“やんばる”の山中でハブ捕り物語や、イノシシ狩りの話の方に受けがよかったようだ。

ゼミや部活では“やんばる”の国頭村奥あたりの海岸でキャンプを張り、よく「ひいーじゃー会」と称して山羊のバーベキューの手料理をするのが、自慢であった。山羊解体のときは、それが生物学の実習となり、夕方になると砂浜に円陣を組んで泡盛を酌み交わしながら自然の摂理や人生論など夜を徹して、学生たちと語り明かした。もう、そのようなエネルギーはどこを突いても出て来ないが……。

当時、講義のほかには部活の指導にも熱が入った。すばらしい学生たちとの出会いは、沖大で得た大きな宝物の一つである。学生とは講義で付き合う時間より、部活動やクラブの指導をつうじての付き合いが多かった。実際の実地指導をしたクラブには、ワンダーフォーゲル部、写真クラブ、海洋生物クラブ、書道クラブなどがあった。写真クラブ員の諸君とは部室の一角に研究室から机を移し、部員と寝起きを共にした日々が続いた。当時は芸術家への登竜門として沖縄タイムス社が主催する芸術祭が年に一度開かれていて、現在まで続いている伝統ある展示会がある。この写真の部に現役で入選する学生が輩出したのもその頃であった。

これまでの卒業生の中からは写真報道で身を立てたプロや環境保護関係の会社の重役、本土でロッジ経営をして成功している卒業生らが輩出している。また学生運動などが盛んであった時代で、よく議論をした自治会執行部の強兵たちも、いまでは、皆さんそれぞれの職場で社会人として誇りを持って頑張っているのがうれしい。

現在の探検部は筆者のゼミを履修し終えた学生が、自然の魅力に惹かれて、後に結成したクラブで、現在も顧問を引き受けているが、当時は夏休みには長期遠征で西表のルート探査やムカデ採集などでよくキャンプを張ったが、最近

は山に行く部員が少なくなって寂しい。時代は変わり、学生気質も変わったが、とにかくゼミ学生や部活の学生と寝食を共にして自然を教室代わりに自然学を学んだことがよかったと思う。筆者も学生気分を堪能した青春が懐かしい。

## B. 研究テーマ：百足(ムカデ)人生のはじまり

### 「土壌動物」との出会い

土壌動物とは土壌中または地表面に生息する動物全般の総称であると考えてよい。数ミクロンのバクテリア(ミクロファナ)、数ミリのダニ、蜘蛛、ムカデ、ヤスデ、ゲジ、サソリ、ミミズなどの中型の小動物、大型動物ではモグラ、ヘビ類など広い範囲にまたがる動物群である。形や生活様式も多種多様で、土壌中の腐植質や枯葉を食する植物食性と幼虫や小型の動物を捕食する肉食性に分けられる。一般にグロテスクな形やくねくね歩く行動から嫌われる動物が多く、不快動物の汚名を着せられている。

とりわけ筆者の研究対象は、土壌動物のなかでも毒腺をもつ、ムカデ・ゲジの類と足の多いヤスデ類を含む多足類の仲間である。筆者のムカデ・ヤスデ類研究は43年まえにさかのぼる。

1958年(昭和33年)戦後はじめて沖縄で全日本生物教育大会が沖縄で開催することになった。そのとき記念事業として沖縄産動物目録を編纂することになり、目録編集委員としてこれまでまだ未分野であった多足類部門の担当を引き受けたのが、ムカデとの出会いである。

当時米軍による植物目録はあったが、琉球列島に関する動物目録はまだ編纂されてなかったように思う。

当時目録編集作業の主編集に尽力された岡田弥一郎博士を中心に、本土から琉球列島の動物に関する各分門の研究者の協力を得て、参考文献などの収集が進められた。

しかし、沖縄現地では、戦災で資料はほとんど散逸していたので、新たに県内各高校の生物教師たちで資料・標本収集委員会を作り、手分けして文献や現存する動物の同定や採集と確認作業に努めた。

そのころ、一冊の文献「日本倍足類総説」高桑良興著が入手。開いてみると

琉球産ヤスデ類が22種も記録記載があるではないか。沖縄にヤスデの種類がこんなにあるとは！しかも聞いたことも、見たこともない種類ばかりだった。その興奮はまるで子供のように好奇心と探究心が雲のように湧いてきた。あのとときの興奮は今でも鮮やかに記憶に残っている。興奮が覚め止まぬ内に文献と現物の採集を思い立ち、那覇内のブッシュの土壌を漁り、夏休みには「やんばる」まで出かけ、ムカデ標本の採集に熱中した。

しかし、実物標本が採取されても、検索や同定（検索して種名をつける作業）が出来ず、分類作業は遅々として進まなかった。とうとう、編集締め切り期間に合わず1958年版大会記念の沖縄動物目録にはヤスデ綱とムカデ綱の部は残念ながら掲載されなかった。これほどに悔しい思いをしたことはなかった。編集に間に合わなかった悔しさよりも、郷土の自然について知らなさ過ぎた自分をはじた。

以来、いつの日にか、かならずや琉球の多足類（ムカデ・ヤスデ類）の実体を明らかにすることを密かに心に誓った。

あれから、琉球列島産多足類の系統分類と地理分布を中心に探査をして40年が過ぎた。

## Ⅱ. 沖縄大学の沿革

### A. 沖縄大学民主化闘争

沖縄大学は嘉数昇氏（理事長）と津子（常任理事）夫妻により沖縄高校を設立(1956年)後に1958年短期大学として発足。ついで1961年四年制大学を創立させた。

大学の校舎は東に琉球王朝時代の名庭園と知られる識名園を望み、西には東支那海に浮かぶ慶良間諸島を展望し、那覇市街ビルを眼下に見る祝嶺の台地に建てられた。沖縄高校と隣接す敷地内に本館ビルと図書館棟と教室をかねた四階建てビルの二棟からスタートしたが、敷地が狭く学生はミニミニ沖大をマツチ箱2個、とからかっていた。

嘉数学園を設立した嘉数昇氏は当時琉球生命相互株式会社の社長で戦後の沖

縄経済再建に大いなる貢献をした人物として知られ、また戦後沖縄県私学振興の功労者でもある。

当時は米軍占領下であり沖縄の施政権は、司法、行政、政治、経済、教育にいたるまで高等弁務官の支配下にあった。1960年代、県民は戦災から十有余年我慢を重ね、異民族支配のもとで不自由を強いられたが、衣食住にも多少のゆとりができ、そして戦後の若者たちは、ようやく衣食住足りて学問への意欲が燃え上がるのに十分熟した時期でもあった。

60年代のころ、沖縄短期大学や四年制大学には定員の四・五倍の応募者が殺到し、狭き門の時代もあった。

とりわけ二部(夜間制)のコースには会社マン、公務員、と多くの勤労学徒が集まり、多くの有能な人材を輩出し、戦後の沖縄社会の再建に多大な貢献を尽くした。

当然学園の財政は豊かとなり、経営的にも大学の社会的評価も定着するかのようにはみえたが、62年ごろから理事会と教職員労組の間で賃金、身分、労働条件や研究環境の改善などと合わせて理事会の体質改善、つまり理事長・常任理事のワンマン経営に対する不満が労使の間で募り、民主化闘争として展開していくが、昭和40年代の社会的背景は60年安保闘争、賃金闘争などが激化した時代であって国民の働く者の権利闘争が盛り上がった時代背景があった。70年代にはいと70年安保闘争を背景に学生運動に火がつき、沖縄では復帰運動と合わせて基地闘争と大衆運動激化時代を迎える。

## B. 沖縄大学と国際大学の統合問題

ときに長期的学園闘争のあおりで学生数は激減し、沖縄の私大はどの大学も財政的にしても、教育・研究環境にしても、その基盤は脆弱性をかかえていたので、復帰後本土の大学と同列に維持できるかという、共通の問題をかかえていた時期であった。

文部省はこの問題を、沖縄の私大はこの際一つに統合して、やっかいな紛争大学を一掃処理するのに絶好のチャンスと考えたに違いない。

沖縄出身で県民から尊敬されている大先輩の早稲田大学総長大浜信泉博士を

仲介に国際大学との統合問題が進められてきた。そうして、沖縄大学嘉数昇理事長をはじめ、理事会はこれに合意してしまったのである。そして、その功勞で嘉数昇氏は私学振興功勞で叙勲の榮譽を賜り、沖縄大学理事長を事実上辞任したのである。

沖大側では、その間、長時間かけて統合をメドにその可能性を模索し、ときに学内大集会などをもって討論・検討をつづた。しかし沖大側の教授会や事務職員および学生の大半が大学の自治と学問の理念を掲げ、これまで大きな犠牲を払ってまで勝ち取った学園民主化闘争の意味を踏まえて、情勢は統合反対を表明した。しかし教授陣や事務職員及び学生の半数は新設大学に移籍することになり、その名も沖縄国際大学と命名した。形式上統合した形だが、実態は沖大には学長はじめ半数の教授職員、事務職員と学生が従前通りに在籍しているのである。それに同窓会など教務事務上の引継ぎが無いままに統合劇は進行していった。

文部省は国際大との統合を完了とみなし、沖大には廃校処分の取り扱いで、翌年の学生募集停止命令が出た。

時の学長佐久川政一教授は文部省に沖大の存続を強く訴えつづけ、沖大に残る教職員・事務職員ならびに学生らの支援のもとに沖大存続闘争を戦った。

筆者らはこの緊急事態に対処すべく、文部省対策として大学存続折衝のため東京行動団を結成、当時筆者は学生部部長の職にあったが、東京行動団の一人に加わり、沖縄出身の衆参議員への実情を直訴、ときには学会や学術会議など大学人や文化人に呼びかけて、沖縄大学の実情と存続を沖縄人の叫びとして精力的に訴え続けた。

その甲斐あって、沖縄大学は短大部と法経学部を残し、新たに認可申請をやり直しすることと見做し大学とし再出発をすることになるのだが、財政的にも累積赤字は積もる一方で、90年代の18歳人口の減少に対抗する手段は改組転換を図るしか生きる道はないとし、厳しき財政問題、大学研究環境、学生生活環境の改善や学生対策など押し寄せる難問が山積した。連日長時間の教授会議や議論に疲れがたまり、人間関係にも亀裂が生じ始めた。

歴代の学長や執行部は、校舎ビルの増設、研究施設の改善、図書館の整備と

充実など物的条件は出来るところから着手し改善に努めた。教授陣容も年次計画で充実していった。

しかし、教授会は相変わらず不満と焦り、先々の不安がつのり、教授会はいつも荒れ模様の天気である。

そのとき、これまで自然を相手に学問してきた筆者は多くの人生経験を会得した。

社会の厳しさと人間の温かみ、政治の裏表、本土への沖縄返還の意味、沖縄の日本人、日本の沖縄人、を垣間見ることが出来た。

### C. 沖大存続闘争

一般学生は教員労組や事務職労組とは一線を画してはいたが国際大学との統合に反対するものが多く、同窓会、学生自治会などは頑として統廃合に反対の姿勢を示した。双方とも徹底抗戦の姿勢を堅持し、長期スト、大学封鎖を敢行、これに対し理事会側はロックアウトや学長をはじめ組合執行部などの告訴、首切りなど熾烈な戦いが続いた。

その頃、沖大は紛争大学としてマークされ、学生の応募は減少し、学園の財政はどん底に陥り、教務維持費どころか職員の給与も払えない事態が数ヶ月もつづいた。家計は苦しくなるばかりで、親・親戚知人でも私の顔も三度までで、金策に苦しんだ。

苦肉の策として、理事会の兵糧攻めに対抗する手段として学生の授業料や労働金庫などから、一時借り受けの形で日々の生活や闘争費用に当てて頑張った。いわゆる自主管理である。しかし、ロックアウトされた学園内に立ち入れないため、市内のホテルやホールなどを転転と借りて自主管理闘争で対抗した。

なんとか解決策はないものかと日夜会議、集会・デモを繰り返す日々がつづいた。沖大のデモは単なる学内デモだけでなく、県下の労働団体や父兄、多数の市民を挙げてのデモで時に数千人のデモを打つこともしばしばあった。

しかし学園理事側は裁判訴訟や教授職員の首切りなどで攻勢にでるばかりで解決のメドがたたない。とうとうU教授は学門まえでハンガーストを決行。ついで筆者も後続をうけて二番手でハンストに加わった。水と差し入れのジュ-



スのみで6日間頑張った。

事態の深刻さと早期問題解決を願って、講義の再開と入試の実施を可能にするため、ハンスト・テントのなかで入試の試験問題を作問した時、涙がでた。このことはマスコミや新聞報道で大きく注目を集め、関係者父兄や各階の有志など多くの市民から力強い支援を得た。ようやく理事会との団交も進展し、ロックアウトの解除、学園側との話し合いで、ひとまず授業再開のメドが付き、学園はとりもどすことができた。

そのころ、ある程度予測はされたものの、本土復帰とは日本の行政や組織の系列化であるとはまだ実感していない。しかし、その波紋は各処で大きな波紋を起こし始めていた。

やがて学部統合と短大を廃して新学部設置の動きようやく固まりかけて1997年人文学部にコミュニケーション学科と福祉文化科の設置認可をとりつけた。そして'99年から新規募集ができるようになり、あわせて明るい沖大像を象徴するかのように新校舎ビル三号の落成をみた。それはちょうど沖大が長いトンネルから抜けて陽光を見る思いがした。

#### D. これからの沖大

これまでの沖大の変動は、十年周期で大きな波が押し寄せ、幾度か沈みかけてきた。

沖大は2001年には学部創立40周年を迎える。その道のりは苦渋に充ちた歴史であった。

1. 民主化闘争（理事会体質の改善の要求と教育労働条件の改善をめぐる。）  
63年～65年
2. 嘉数学園沖縄高校と沖大との法人分離をめぐる要求（分離闘争）  
66年～72年
3. 国際大学との統廃合問題  
72年～73年
4. 大学存続闘争  
74年～76年
5. 新生沖縄大学認可、単科大学で再出発
6. 大学中期構想 模索

- 7. 改組転換 法学と経済科の改組、
- 8. 短大部 廃止 99年
- 9. 新学部「人文学部」への認可申請 条件準備 95年～97年
- 10. 人文学部2学科認可される。 学生募集開始 99年～2000年

思えば、創立時代から在職した教授ならびに事務職員の忍耐と努力の苦節四十年の私生活との闘いでもあった。その意味では、沖大の歴史は沖縄の激動する戦後史の縮図として投影されて推移してきたように思う。しかし、これまで幾度か存亡の危機にさらされながら、その難関を何とかクリアしてきたが、ほぼ10年周期で大きな危機が押し寄せてきているのは偶然の悪戯か、必然の因果か？

沖大の40年の歴史から受ける教訓を筆者なりに挙げるとすれば、大学存立基盤が脆弱の点にある。新人はいつでも古い皮を破り、新しい酒を入れたがる。古い習慣をぶち壊すのも難しいが、それにも勝って新しい伝統をつくるのは、さらにむつかしい。

沖縄大学は上記に掲げる沿革にあるように創立以来、闘争絡みの問題が多すぎた。ミレニアム紀は何とか安定期をめざして21世紀に対応できる体制固めを願うものである。過去の反省から、これまでの問題点を大まかに列挙してみよう。

- A. 大きな転換があるとき 組織の改組と人事の計画的採用ができていない。
- B. 財政的豊かさと研究条件の改善
- C. 理事会組織と機能の問題
- D. 教授会のあり方と体質
  - イ) 全学教授会のあり方(無駄が多すぎる)
  - ロ) 学部教授会
  - ハ) 学科会
  - ニ) 地域研究所
- E. 財政基盤の安定性とその確保
- F. 地域社会との交流と大学の機能など

G. 同窓会組織の強化と人材交流

H. 地元からの人材発掘と沖大に貢献する人材の確保

以上、経営的にも、教育的にも政策、ビジョンを早期確立することが肝要であろう。

### Ⅲ. 研究テーマから 「琉球産多足類の現状」

#### A. 日本産多足類の流れ

世界の多足類学は19世紀のはじめ、フランス、ドイツ、イギリスの動物学者らの研究で進められてきたが、とりわけ日本の多足類研究は L.Kock (1878) により明らかにされた部分が多く、その功績が大である。そのほかに1841年以来、多足類研究者には学名でおなじみの深い世界的に知られている学者では G. Newport、Pcock、Broelemann、Attems、Verhoeff、Chambelin、Wang (台湾大)等の賢学者の貢献が大きい。

日本で古い記載は1894年(明治27年)中川久和(第五高教授)による「日光の多足類」、「熊本の多足類」について動物学雑誌(第6巻71号)に紹介されたのが最初とされている。また1912年(明治45年)谷津直秀博士は Miner (米)に日本産オオムカデの同定を依頼したことがきっかけで学術交流が始まったと云われる。

本格的な多足類の研究は1920年代に入り、高桑良興博士によりその道が開かれたといえよう。後述するが博士の著書「日本倍足類総説」(1949年)は筆者に道を開いてくれた貴重な入門書の一冊である。

ムカデ類については 高桑良興著、1940年(昭和15年)日本動物分類第9巻8編1号(ジムカデ目)、ついで2号(オオムカデ目)、1942年8編3号(イシムカデ目)がある。また「日本倍足類総説」は太平洋戦争のため戦禍にあい出版が大幅に遅れたが高弟高島春雄等の尽力で昭和29年に出版された貴重な文献である。上記に掲げる文献はいずれもムカデ類、ヤステ類に関する日本最初の検索記載があるが、日本産ムカデ類ヤステ類を研究する者にとって最初に必読すべき一

級文献として上げて置きたい。

戦後は高島春雄（山階鳥類研究所）岸田久吉（農林技官）、江崎悌三博士等や高桑良興博士が東京高等師範時代の高弟にあたる三好保徳博士、篠原圭三郎、小川一夫、村上好史各氏等の活躍により現代の多足類学の基盤が築かれて現在にいたっているといえよう。

年々若い研究者が増えつつある傾向は喜ばしいことであるが、戦時中の研究環境が悪条件のもとで先学の研究が並大抵の苦労ではなかったことを察するとき、身が引き締まる思いがする。

現在、世界の多足類学者の実数は十分把握してないが、80年代の Myriapods 会員から推察すると、およそ8000人~10,000人である。日本では土壌動物に対する関心が薄く、あまり知られてないようであるが、おそらく、日本多足類の研究者は世界の1割程度とみている。

1960年代以降環境問題や森林生態が重視されるようになり、土壌生物に対する関心も高まるにつれて、多足類に関心を持つ人々がふえつつあることは確かである。

さて、琉球産多足類の最初の記録は“Report upon the Chilopoda from the China Sea”, Mr. R.I.Pocock on Chilopods (1895年) 報告書の中で Located Great Loo-Choo の記載が散見できる。

現在、日本産多足類の総数はおよそ434種（1990年レベル）が記録されている。そのうち、琉球産多足類が87種（1984年、大嶺）の記録からすれば、日本産多足類のおよそ20.05%を占有していることになる。またその種群の中には琉球産固有種が14種も含まれており、琉球列島の野生生物が多様性に富み、とくにヤステ類には本土には棲息していない珍しい種類が多い。

## B. 琉球産 多足類分布の傾向

- 1) ムカデ類で見ると、南方系種は石垣以南で著しく、沖縄諸島で南北混成型が増加の傾向になる。そのことが、沖縄の自然の多様性を豊かにしている。
- 2) つまり、島嶼分布の移動型が増え、分散域が広域に広がる傾向がみられる。

- 3) ヤスデ類では、島嶼分布をする種群には遺留型分布をするものが多く、各島ごとに地方変異型が多くみられる。ちなみに島ごとの固有種が多いのが特徴である。
- 4) ムカデ類やヤスデ類の種類数は本州や九州に比べて多様度が高いが、個体群の大きさは小さいのが特徴といえよう。

琉球列島の野生動物の豊かさ度から見ると、昆虫類・鳥類・哺乳類などに固有種が25%もしめている。これは、多数の貴重な天然記念物指定生物を占有しているが、琉球列島/全日本の面積比=0.01%からすれば驚くべき種の多様性をしめている数値である。つまり、狭い自然環境にありながら、いかに琉球列島の自然が豊かで、すばらしい環境にあるかがわかる。このことは土壌動物(多足類)でも証明している。

#### C. <ムカデ学から学んだこと> 森林環境の危機：

お陰で、地域の自然の移り変わりをムカデ・ヤスデ類ともに概観してきたが、その間机上のみならず生きた自然を垣間見ることができたことに喜びを実感している。

一見、多足類は人生や社会と無縁のように思えるが、無脊椎動物、節足動物たちが如何して、あのような形態をしているのか。その進化のなぞはまだわかっていない。

しかし、南と北を結ぶ琉球列島の小さな島々に棲んでいる生物が何処から来て、何処へいくのか、遠大な謎解きの手がかりになれば幸いである。

#### 森林環境の指標としての土壌動物：

土壌動物は森林の林床で分解者や消費者としているの重要な役割があることがわかっているが、気候帯や地勢または地域性などで、その条件は異なるので、土壌動物成分の差異はその森林林床の変動の Index となりうる。したがって多足類その他の土壌動物の分布や成分の量的測定により、およそつぎのことが解りかけてきた。すなわち、

- ① トビムシやワラジムシ、ムカデ、ヤスデの固体数や種数の変動は森林林床の分解量との相関があること。

- ② 鳥類やイノシシ等の餌さとして食物連鎖から豊かな森林の条件、(自然度指標)
- ③ 様度指標として有効である。<琉球列島で軍用地内の自然度指標作成中>などを挙げることが出来る。

筆者にとってムカデ・ヤステ類との出会いから40年、袖振り合うも多生の縁で始めた多足類学は筆者に、社会的にもさまざまな貴重な体験を授けてくれた。“やんばる”や西表島をはじめ六十余りの島々の採集を通して琉球列島を自らの足で踏破することができた。

筆者は主として、多足類を素材にして系統分類学と地理分布論を展開してきた。そして、初期のころ琉球列島の多足類は種群で22種の記録があった。その後、筆者の調査で87種が追加して、大きくその分布地図をぬりかえたことや、また、筆者は、これまでミスリングにあった琉球産多足類の種群や世界の分布との繋がりを一応明らかにすることが出来た。多少なりとも分類学や生物地理学的に一応の成果を得たことを記して置きたい。

実は、これらの成果をまとめて琉球産多足類図鑑の発刊を考えて、こまめに記録写真を撮り、収録している矢先、1989年10月26日、未明に実家を火災で全焼してしまった。家族に怪我はなく、全員無事に脱出できただけでも幸いと云わなければならないが、その時、またとない貴重な資料を灰塵にってしまった。以来、この企画はお預けになったままである。

そのほか、遣り残しのしごとが山積みされているので、未だこの仕事は終わりにそうにない。そのうえ、ムカデを通じてさまざま世界が見えて来たので、「日暮れてなお道遠し」の感はあるが、あと少し頑張りたい。

末尾になったが、これまで格別のご指導ご鞭撻を賜った歴代の指導教官各位をはじめ、先輩各位・同僚の皆様に対し、衷心より厚く御礼を申し上げると共に、蔭にあっていつも筆者の健康に気を遣い、研究生活を支えてくれた、家族の深い理解と協力があつたことを記して感謝の意を表したい。

以上、取り留めのないことを並べたが、拙稿を終る。

感 謝

写真資料

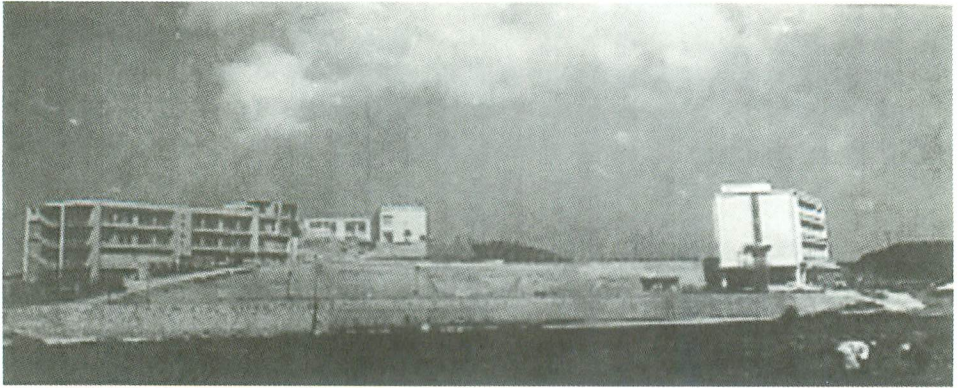


写真-1-A 1961年ごろの沖大校舎  
開学当初の本館ビル<右>

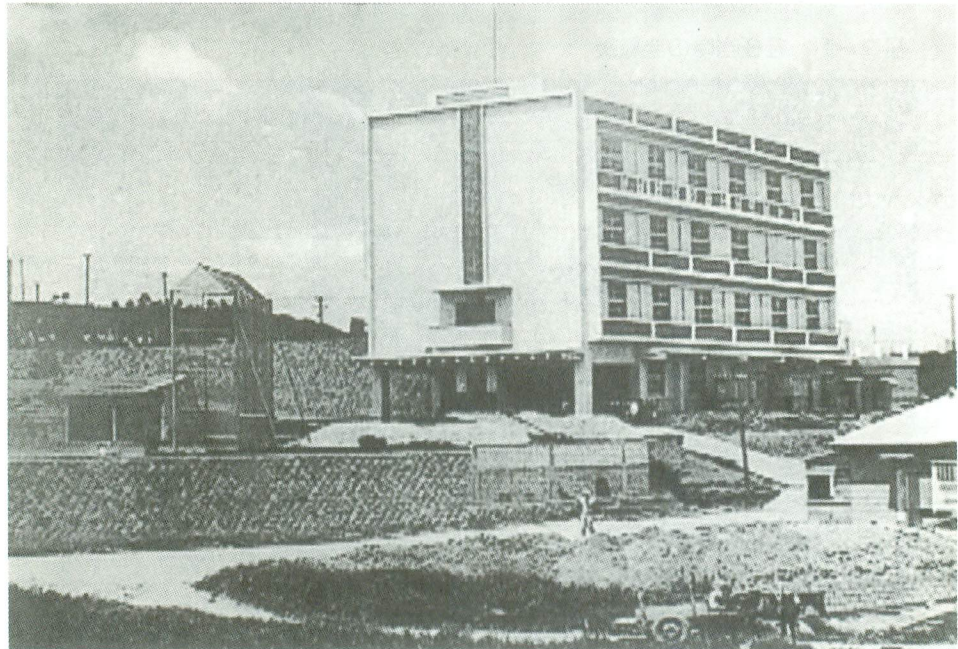


写真-1-B 手前の青馬車がなつかしい。前方、本館ビル全景(同窓会誌より)





写真-2 赴任当時の全職員



写真-3 自治会執行部との話し合い 左から二人目 知花昌一自治会長  
右から二人目 大嶺学生部長





写真-4 探検クラブ「西表島 探検隊」1990年8月

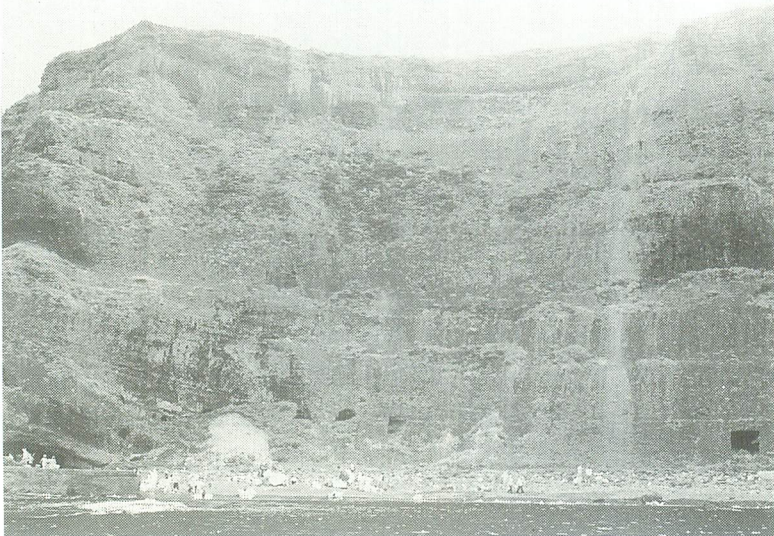


写真-5 硫黄島(無人島)探検



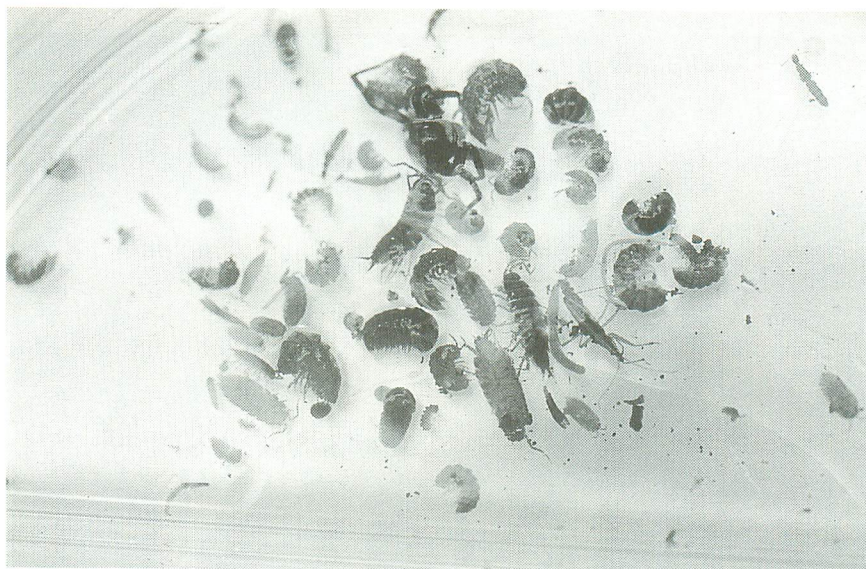


写真-6 土壤動物の一例(採取サンプル)



▲写真-6-A 冬虫夏草 ツブセミタケ

◀写真-6-B 冬虫夏草 カメムシタケ

資料：研究論文および調査報告その他

件数	年・月	昭和	論文・著書・報告タイトル	著書・論文・報告・資料	発表学会・紀要
1	1962・3	S.37	伊平屋の動物相	調査報告	沖大論叢通巻3号(第2巻1号)
2	1963・1	S.38	沖縄産倍足類目録編集(沖縄初)	資料	沖大論叢通巻4号(第3巻1号)
3	1964・3	S.39	沖縄産唇脚類目録編集(沖縄初)	資料	沖大論叢通巻5号(第3巻2号)
4	1965・10	S.40	沖縄産倍脚類(ヤステ)とその分布	論文	沖大論叢通巻9号(第6巻1号)
5	1965・12	S.40	「新産のヤステ類」(新記録種発表)	論文	沖縄生物学会誌
6	1968・10	S.43	琉球列島から採集されたヤステ類	調査報告(戦後初の発表)	日本多足類(雑誌)[創刊号]
7	1969・3	S.44	沖縄産ムカデ類	論文	沖大論叢通巻14号(6巻1号)
8	1970・12	S.45	沖縄産ヤステ類	論文	沖縄生物学会Bio.Mag.Vol.2.Dec.
9	1973・3	S.48	Ecological Studies of Nature conservation of the Ryukyu Islands. Series-1	琉球大学陸上動物研究チーム(共同研究)	
			Series-2	「琉球列島の自然とその保護に関する基礎研究シリーズ」	
10	1974	S.49	Series-2	論文シリーズ-2	琉球大学動物研究班
11	1976	S.51	Series-3	論文シリーズ-3	同上
12	1975	S.50	沖縄県本部半島周辺の動物予備調査	沖縄海洋博覧会環境アセスメント	沖縄県教育委員会
13	1976	S.51	「天然記念物緊急調査」[動物・植生地図作成]	全国シリーズ、47-沖縄	文化庁
14	1977	S.52	慶良間シカ実態生態調査	合同調査[琉球大学動物研究班]	沖縄県教育委員会
15	1980	S.55	「沖縄本島中部(中城湾沿岸)を中心とする動物相概観」		沖大紀要通巻21号(第1号)
16	1980・7	S.55	雑誌動物と自然-「沖縄のムカデ・ヤステ類」	論文	ニューサイエンス動物専門雑誌
17	1982・3	S.57	「西表島中央の土壤動物」	調査 論文	沖大紀要通巻22号(第2号)
18	1983・3	S.58	硫黄島島の土壤動物調査	調査 論文	沖大紀要通巻23号(第3号)
19	1984・3	S.59	国頭大国林道の側溝の動物季節変動	調査 論文	沖縄生物学会誌 Big.Mag.22
20	1984	S.59	南西諸島とその自然保護	論文	日本野生生物基金(WWF.J)
21	1985・6	S.59	ふるさとの動物たち(沖縄園芸百科)	図鑑(共同)	琉球新報出版社
22	1985・3	S.60	減り行く琉球孤の野生生物群	論文	沖大紀要通巻24号(第4号)
23	1987・7	S.62	琉球列島の動物分布特性と遺存種(1)	論文(シリーズ-1)	総合科学雑誌 [遺伝] 7月号
24	1987・8	S.62	同上(2)	シリーズ-2	8月号掲載
25	1987・10	S.62	国頭郡天然記念物緊急調査	調査 論文	沖縄県教育委員会
26	1990・7	H.1	琉球列島の自然環境(戦後沖縄社会変動)	論文(共同)	アテナ書房
27	1991	H.2	沖縄県における県民の栄養シリーズ(1)	論文	沖大紀要通巻27号(第7号)
28	1992	H.3	栄養シリーズ(2)	論文	沖大紀要通巻28号(第8号)
29	1993	H.4	栄養シリーズ(3)	論文	沖大紀要通巻29号(第9号)
30	1993・3	H.4	沖縄本島・西表の自然の価値について	世界自然遺産リスト(推薦論文)	世界ユネスコ(国際教育日本センター)
31	1994・3	H.5	「西表産一冬虫夏草」	報告・論文	沖縄大学地域研究所 年報
32	1995・3	H.6	米軍基地内の自然環境調査から	報告・論文	沖大紀要通巻32号(第12号)
33	1998・3	H.9	Abundance and Diversity of Soil Macro fauna in Yannaru... in Yannbaru Northern Montagne Part of Okinawa Is.	共著(調査報告論文)	沖大紀要通巻35号(第15号)
34	2000・3	H.12	私の百足(ムカデ)人生と沖縄大学	随想・(多足類小研究史)	沖大紀要通巻36号(16号)

おもな発表と講演（70年～90年代）

1	1973・3	S.48	西表島の多足類	講演	沖縄生物学会
2	1981・5	S.56	沖縄の自然と私たちの暮らし	講演	那覇市社会教育委員会
3	1982・5	S.57	沖縄の自然環境	ROKラジオ沖縄放送講座	女性ジャーナル(教養講座シリーズ)
4	1982・10	S.57	島の自然と私たちの生活	市民講座(宮古教育委員会)	宮古市移動市民大学講座シリーズ
5	1992・8	H.3	沖縄の森林と林床の特性	講演	日本冬虫夏草学会
6	1994・5	H.5	沖縄の冬虫夏草と今後のバイオマス	沖大土曜講座	与那国教育委員会
7	1995・6	H.6	西銘岳周辺のイタジイ林の下刈の影響	学術発表	沖縄生物学会
8	1997・2	H.8	島の自然と健康	移動市民大学シリーズ	渡嘉敷教育委員会
9	1998・9	H.9	遺伝子組み替え食品とは	那覇市中央公民館教養講座	那覇市社会教育委員会
10	2000・2	H.12	島の自然と食生活・健康	講演	南大東教育委員会